

詩という眼帯

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2018-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 白石, 幸作 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/19750

詩という眼帯

Bandeau des poèmes

博士後期課程 仏文学専攻 2013年度入学

白石 幸作

SHIRAIISHI Kôzaku

【論文要旨】

本論は、20世紀フランスの詩人ルネ・シャルについて論じたものである。彼の書いたものの中には「詩人」とは何なのかという詩をめぐる本質的な問いが常に伏在しており、シャルのテキストにおける「詩人」について考察を試みた。本論は四部構成をとっているが、1から3が主部である。シャルの作品は断片的であるため、分析対象として扱ったテキストは様々な時期に執筆されたものとなっている。1では、「眼帯」と題されたテキストがあるのだが、このタイトルの意味について考察している。シャルという詩人の神秘主義的性格をこの語から読み取ることができるのではないかと考えた。2では、シャルが詩を書く上で最も重んじた詩人であるランボーと、絶えざる生成変化を論じた。この二つの問題は、おそらくシャルのテキストにおいて緊密に結ばれている。3では、ヘラクレイトスやニーチェに触れながら、真理（真実）を覆うヴェールとしての神秘について論じた。シャルは、謎としての詩を書くことで、神秘を守ろうとしているのである。

【キーワード】 ルネ・シャル アルチュール・ランボー 詩人 神秘主義 生成

1

ルネ・シャルRené Char（1907-1988）は、あるテキストの中で「なぜ、「詩人」という語が何度も私をよぎるのか」¹と自らに問いかけたことがある。ここで「よぎる」と訳した動詞 tra-

¹ René CHAR, *Œuvres complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, Éditions Gallimard, 1995（以後、OCと略記する。仏語文献の日本語訳は拙訳を用いる。）、p. 744: «Pourquoi le mot «poète» me traverse souvent?», 「古い印象」*Impressions anciennes*より引用。このテキストの末尾には、1950, 1952, 1964と複数の執筆年が記されている。散文作品集『基底と頂上の探求』*Recherche de la base et du sommet*（1955年に初版、その後、改訂増補版が65年, 71年に出版）に収録されている。

verser は、「通過する」、「貫通する」などとも訳すことができる。ただ単に、「詩人」という語が頻繁に彼の頭に浮かんだということの意味しているのではなく、おそらく生涯を通じて「詩人」という語は、それ自体が自立した語として外部から、シャルルを何度も何度も貫いたのである。「詩人」について集中的に言及しているのは、筆者の見るところ、アフォリズム集「形式的分割」Partage formel であるが²、「詩人」の問題はシャルルのあらゆる時期の作品に散りばめられていると見てよい³。

シャルルの詩集『激情と神秘』*Fureur et mystère* が出版されたのは、1948年9月のことである。戦時中に書かれながらも「名づけようのない状況」⁴下では発表されることのなかった『ただ留まるのは』*Seuls demeurent*, レジスタンス活動の記録という側面も持つ『イプノスの紙片』*Feuillets d'Hypnos* を含む総合詩集である⁵。1948年7月に出版された『エスプリ』*Esprit* 誌の第7号には、『激情と神秘』の紹介文として「詩人」Le poète と題された文章が発表されている⁶。この文章は後に加筆され、さらに新たなタイトルとして『「激情と神秘」という眼帯」Bandeau de «Fureur et mystère» が付され生まれ変わることとなる⁷。シャルルは、何冊かの自作について文章（「眼帯」）を書いており、複数の「眼帯」Bandeaux と名付けられたテキスト群が存在するのである⁸。

筆者は長い間、この Bandeau という語が何を意味するのか分からずにいたが、おそらくこれは「眼帯」を意味しているのである。日本語で「眼帯」と言えば、通常、片方の目にのみ被せる布を指すことになるだろうが、ここで問題になっている「眼帯」としては、両目を覆い隠すための带状のものを想像してもらいたい。なぜ、タイトルに Bandeau が選択されたのか。その理由は、シャルルという詩人が持つ神秘主義的性格に由来していると考えられる。神秘主義 mysticisme 「という言葉の語源はギリシア語のミュエーオーであって、これは「閉じる」ということである。目を閉じることによって眼前の区別は消滅し、神と人間との区別も消失して、人間が神と合一するという

² 「形式的分割」における「詩人」については、以前論じたことがある。白石幸作「ルネ・シャルル「明白なる分け前」試論——「詩人」と「変形」——」（『文学研究論集』明治大学大学院文学研究科、第39号、2013年、pp. 15-31）。しかし、十分に論じることはできておらず、また訂正すべき点も多い。シャルルのテキストにおける「詩人」については、白石幸作「ルネ・シャルルと断片の力」（『文芸研究』明治大学文学部紀要、第133号、2017年、pp. 132-120）でも論じている。こちらも参照してもらいたい。

³ 特にテキストにおける「詩人」を問題とする場合、「詩人」と括弧つきで表現する。

⁴ OC, p. 632 : «l'innommable situation», 「フランシス・キュレルへの手紙」Billets à Francis CUREL の I より引用。執筆は1941年。『基底と頂上の探求』に収録されている。

⁵ シャールルは、まず小規模の詩集を出版し、その後それらの先行する詩集をまとめた総合詩集を出版するという方法をとっている。詩集の編纂、また執筆や出版の年代について詳細に論じると煩瑣になるため、本論では簡単に記す。『ただ留まるのは』は1945年2月に、『イプノスの紙片』は1946年4月に出版された。「形式的分割」は『ただ留まるのは』に収録されている。

⁶ OC, p. 1423を参照。

⁷ 雑誌初出時の「詩人」は、René Char. *Dans l'atelier du poète*, édition établie par Marie-Claude CHAR, Éditions Gallimard, coll. «Quarto», 2007, p. 551に収録されている。

⁸ OC, pp. 653-657.

のが神秘主義である。したがって神秘主義とは呪術的、魔術的神秘主義もあるが、神秘主義の本意は、人間の認識（認識とはそもそも区別の認識である）が成立する以前の、主観—客観未分の根源にかかわるといふ高度に哲学的ないし宗教的なものである⁹。しかし、シャルルは「神の死」以後を生きる詩人である。（たとえば、「破壊された神」*dieu détruit*¹⁰、「神性の放棄というとてもない断絶」*la faille géante de l'abandon du divin*¹¹。）絶対的な神を前提しての神秘主義ではない。彼にとって、「目を閉じる」という行為は、神との合一とは別の意味を持っていたと考えられる。

『激情と神秘』という眼帯には、次のような記述がある。

彼「詩人」は呪いの中にいる、それはつまり、彼は永続的で繰り返し現れる危険を引き受けるということ、同時に、他の人々が目を閉じながら受け入れることを、彼は目を開きながら拒絶するということである、詩人であることの利得¹²。

もちろん、「目を閉じている」ことと「目を開いている」ことを単に文字通りに受け取るべきではない。ここで問題になっているのは、「詩人」の「目」である。他の人々が、無批判に、盲目的に受け入れてしまっていることを、彼の「目」は見逃さないのである。「詩人」が特別な意味で見る者、つまり「見者」*Voyant* であることは、シャルルにとっては言うまでもないごく当たり前のことであった。

ランボーに接近する前に、今日まで彼について用いられてきた全ての呼び名のうち、そのどれをも（見者ランボー、不良ランボー等々）、私たちは採用することも拒否することもしないということを明記しておきたい。ただ単に、それらの呼び名は、正確であろうとなかろうと、相応しかろうとなかろうと、私たちの興味を引かないのである、なぜならランボーのような存在は […], それらの全てを必然的に含み持っているからである。詩人ランボー、それで十分であり、それは無限なのである¹³。

⁹ 小田垣雅也『キリスト教の歴史』講談社（学術文庫）、1995年、p. 122。

¹⁰ OC, p. 169, 「形式的分割」の末尾に置かれた詩作品「任務と解任」*Mission et révocation* より引用。

¹¹ OC, p. 255, 『破碎されたポエム』*Le Poème pulvérisé*（1947年に出版され、後に『激情と神秘』に収録される）所収の詩作品「境界」*Seuil* より引用。なお、シャルルのテキストにおいて「ポエジー」*la poésie* と「ポエム」*le poème* は厳密に区別されている。本論では、「詩」という言葉を頻繁に使用しているが、翻訳など厳密な区別が必要な場合には「ポエジー」、「ポエム」というカタカナ語を用いることとする。

¹² OC, p. 653 : «Il [le poète] est dans la malédiction, c'est-à-dire qu'il assume de perpétuels et renaissants périls, autant qu'il refuse, les yeux ouverts, ce que d'autres acceptent, les yeux fermés : le profit d'être poète.», なお、[] は筆者による註、省略等を表す。

¹³ OC, p. 727 : «Avant d'approcher Rimbaud, nous désirons indiquer que de toutes les dénominations qui ont eu cours jusqu'à ce jour à son sujet, nous n'en retiendrons, ni n'en rejetterons aucune (R. Le Voyant, R. Le Voyou, etc.). Simplement, elles ne nous intéressent pas, exactes ou non, conformes ou non, puisqu'un être tel

「詩人ランボー」は、シャルルにとって最も重要な詩人である¹⁴。「ランボーによって、ポエジーはひとつの文学ジャンル、ひとつの競技であることをやめた」¹⁵。同時に、「詩人」もその在り方を変えたのである。「詩人とは真に火を盗む者なのです」¹⁶と、いわゆる「見者の手紙」の中でランボーが書く時、ギリシア神話の神プロメテウスと「詩人」を重ねながら、彼は「詩人」という言葉に途方もない意味を込めている。「詩人は人類を担っており、動物たちさえも担っているのです」¹⁷。「詩人」には大きな責任がのしかかることとなる¹⁸。

しかし同時に、「詩人」は現実世界を超越した存在を意味しているのではないことを覚えておくなくてはならない。それははっきりとテキストに記されている。『イプノスの紙片』の冒頭にはこうある。

イプノスは冬を捕らえ、冬に花崗岩を着せた。冬は眠りになり、イプノスは火になった。続きは人間たちのものだ¹⁹。

神話的表現に続く、現実の危機の中で書かれた言葉たちは人間の次元に属する。そして、「詩人」はこの「人間たち」の側にいる。レジスタンスに参加している間、書き続けられた紙片群がその証明であり、また戦後、シャルルはこう書くことになるのである。

麻痺状態から私を目覚めさせること、ポエジーを始動させること、私が打ち勝つために長年の砂漠の果てへと私を立ち向かわせることができるのは、女性であろうと男性であろうと共に歩む者、私の同胞だけである。他には何もない。天でもなく、特別な地でもなく、人々を感動で震えさせるものたちでもない。

que Rimbaud [...] les contient nécessairement toutes. Rimbaud le Poète, cela suffit, cela est infini.», シャールによるランボー論「アルチュール・ランボー」Arthur Rimbaud より引用。1956年に執筆され、『基底と頂上の探求』に収録される。

¹⁴ 『『激情と神秘』という眼帯』では、ランボーの他にも数名の人物の名が列挙されている（アイスキュロス、老子、ギリシアのソクラテス以前の哲学者たち、アビラのテレサ、シェイクスピア、サン＝ジュスト、ランボー、ヘルダーリン、ニーチェ、ファン・ゴッホ、メルヴィル）。これらの人物たちがシャルルにとってどのような存在であったのかを考察することは、今後の研究課題である。

¹⁵ OC, p. 731 : «Avec Rimbaud la poésie a cessé d'être un genre littéraire, une compétition.», 「アルチュール・ランボー」より引用。

¹⁶ 『ランボー全集』平井啓之、湯浅博雄、中地義和、川那部保明訳、青土社、2006年、p. 437.

¹⁷ *Ibid.*

¹⁸ ここでは、ランボーの「見者の手紙」における「詩人」とシャルルのテキストにおける「詩人」をあえて混同させている。シャルルはランボーから詩人としての在り方を学んだと考えられるが、それがどの程度のものなのか、その内実は今後の研究課題である。

¹⁹ OC, p. 172 : «*Hypnos saisit l'hiver et le vêtit de granit. L'hiver se fit sommeil et Hypnos devint feu. La suite appartient aux hommes.*», 原文はイタリック体で書かれているが、日本語訳は読みやすさを考慮し使用しないことにした。

たいまつよ、私がワルツを踊る相手は彼の人だけだ²⁰。

「詩人」は並外れた責任を負うと同時に、「同胞」なくしては存在し続けることもできない。彼が立つのは、神の住む天の国や、どこかの聖地ではない。「詩人」とは「日常の人間」*homme du quotidien*²¹でもあり、彼は我々とともに在ることによって生きるのである。

「眼帯」に話を戻そう。筆者は、神秘主義的性格をシャルという詩人は有していると書いたが、実際にそれがどのような性質のものなのかは、テキストの中で探求するしかないことを読者は予感されただろう。シャルにとって、神秘的なもの、聖なるものは、おそらくキリスト教のような宗教、そしてその神によって決定されるものではない。しかし、とにかくここでは、筆者に *Bandeau* を「眼帯」と訳すことを決断させた言葉を引用しておきたい。その言葉、アフォリズムは、『イプノスの紙片』の中にある。

もし時折、至高のやり方で目を閉じなければ、人間はついに、見られるに値するものをもはや見ることもなく終わるだろう²²。

目を閉じることによってでしか見えない何かがあるのではないか、目を閉じるということが真に物事を見ることへとつながるのではないか。伝統的神秘主義は、目を閉じることで「人間の認識 […] が成立する以前の、主観—客観未分の根源にかかわる」ということであった。ならば、シャルは、詩集という「眼帯」を私たちにもたらしことによって、私たち読者を真実の世界、「世界以前」*L'Avant-Monde* へ導こうとしているのかもしれない²³。

2

ランボーは短い期間に目まぐるしく変化した。シャルは、ランボーについて次のように書いている。「彼の発見、彼の火を放つような日付、それは、はやさ（早さ、速さ）である」²⁴。「火を放

²⁰ OC, p. 378 : «Il n'y a que mon semblable, la compagne ou le compagnon, qui puisse m'éveiller de ma torpeur, déclencher la poésie, me lancer contre les limites du vieux désert afin que j'en triomphe. Aucun autre. Ni cieux, ni terre privilégiée, ni choses dont on tressaille./Torche, je ne valse qu'avec lui.», 1956年出版のアフォリズム集『図書館は燃えている』*La bibliothèque est en feu* より引用。後に、1962年出版の詩集『群島をなす言葉』*La Parole en archipel* に入る。

²¹ OC, p. 727, 「アルチュール・ランボー」より引用。

²² OC, p. 189 : «Si l'homme parfois ne fermait pas *souverainement* les yeux, il finirait par ne plus voir ce qui vaut d'être regardé.», 『イプノスの紙片』は序文等を除くと、全部で237の断片から成っており、そのすべてに番号がついている。これは「59」である。

²³ 詩集『ただ留まるのは』は三つのパートに分かれている。そのうち最初のパートが「世界以前」と名づけられている。

²⁴ OC, p. 733 : «Sa découverte, sa date incendiaire, c'est la rapidité.», 「アルチュール・ランボー」より引用。

つような彼の日付」とは、ランボーの人生と詩が、歴史にその日付を残すような大事件であることを意味しているだろう。それは今もエクリチュール（書かれたもの）として火を放っている。

シャルルも認めるように、ランボーという詩人の特筆すべき点として、「はやさ」がある（日本語としては、「早さ」と「速さ」のどちらの意味も含むだろう）が、シャルルもこう書いたことがある。

お前は急いで書こうとしている
まるで生よりも遅れているかのように
[…]
急げ
急いで伝達しろ
お前の持ち分を、驚異の、反乱の、慈善の持ち分を
実際、お前は生よりも遅れている
言葉では表現できない生
つまるところ、お前が結合することを受け入れる唯一のもの²⁵

ここで言われている「生」、「言葉では表現できない生」は、絶え間ない生成変化を意味していると、ひとまず考えることができる²⁶。もちろん、ひとの意識や思考、そしてものを書くという行為が、この変化に追いつくことはできず、あるなんらかの言語表現を用いて、この変化を定義することができないことも言うまでもないだろう。しかし、この詩における語り手は、その不可能を望み、エクリチュール（書くこと）を絶えざる生成変化に結びつけようとする。さらに、「伝達する」と訳した *transmettre* が「伝染させる」という意味を持つことを考えれば、読者をもこの不可能への挑戦に巻き込もうとしている。

後のシャルルのテキストでは、生成は水の流れることによって示されることになる。友人である画家ジョルジュ・ブラックについて書いた文章にはこうある。

子供たちと天才たちは、橋は存在せず、ただ横切られるがままの水だけが存在していること

²⁵ OC, pp. 80–81 : «Tu es pressé d'écrire/Comme si tu étais en retard sur la vie/[...]/Hâte-toi/Hâte-toi de transmettre/Ta part de merveilleux de rébellion de bienfaisance/Effectivement tu es en retard sur la vie/La vie inexprimable/La seule en fin de compte à laquelle tu acceptes de t'unir», 1936年初版のアフォーリズム集『ムーラン・ブルミエ』*Moulin premier*の最後を飾る「共同の現前」*Commune présence*のⅡより引用。『ムーラン・ブルミエ』は、後に1945年に出版された詩集『打ち手なき槌』*Le Marteau sans maître*（初版は1934年で、1945年のものは最終決定版と考えられる）と統合される。

²⁶ シャールルにおける「生」*la vie*の問題は、より深く考察されなければならないが、また別の機会にあらためて論じたい。

を知っている。それゆえ、ブラックの作品においては、泉は岩場から、果実は土壌から、雲はその運命から切り離されずにいる、目には見えず、そして至高に²⁷。

ここでは、les génies を「天才たち」と訳したが、おそらくブラックをはじめとして、詩人も含めた芸術家たちを指している。「橋」とは、此岸と彼岸をつなぐものだが、シャルルのテキストにおいては、そのような区別が否定されるのである。「泉」と「岩場」、「果実」と「土壌」、「雲」と「その運命」が「切り離されずにいる」ように。此岸も彼岸もなく、在るのは「水」の流れに象徴される、混然一体となった生成の流れだけである。「子供」と「天才」だけが、そのことを「知っている」のだ。「目には見えず、至高に」という表現にも注目すべきである。「至高のやり方で目を閉じる」ことの重要性が、ここでも明言されている。「天才たち」の詩的な芸術は、目には見えない真実を告げ知らせるためにある。

ポエジーは、あらゆる澄明な水の中でも、水に映った橋の影を最短時間で通り過ぎる水である。

ポエジー、新たに名づけられた人間の内なる未来の生²⁸。

水の流れ（＝生成）は、ポエジーと同義である。「水に映った橋の影」には多くの暗示が含まれていることが予想されるが、ここでは何物にも遮られることのない水の流れと解するにとどめておこう。さらに、ポエジーの孕む力は、「新たに名づけられた人間」とあるように、人間に新たな名前（あるいは資格）を与えることを可能にする。その一新された人間の内部をポエジーという生命力が、常にまだ見ぬ未来へ向かって流れているのである。

『激情と神秘』の最後のセクションである「物語る泉」La Fontaine narrative の中に、「君はよくぞ出発したものだ、アルチュール・ランボーよ！」Tu as bien fait de partir, Arthur Rimbaud! と題された散文詩がある。シャルルにとって、ランボーはまず「出発」の詩人であった。今問題にしたいのはこの詩が置かれている位置である。「ソルグ川」La Sorgue、「君はよくぞ出発したものだ、アルチュール・ランボーよ！」、「最初の瞬間」Les Premiers Instants という順番で並んでいる。「水」の流れを重要な要素として持つ二篇の詩に挟まれるかたちで詩集に収められているのである。「一気に、道連れもなく、あまりにも早く出発した川よ/私の国の子供たちに、お前の情熱の顔と与

²⁷ OC, p. 673 : «Les enfants et les génies savent qu'il n'existe pas de pont, seulement l'eau qui se laisse traverser. Aussi chez Braque la source est-elle inséparable du rocher, le fruit du sol, le nuage de son destin, invisiblement et souverainement.», 「ジョルジュ・ブラックを見つめて」En vue de Georges Braque の I, 「ジョルジュ・ブラック」Georges Braque より引用。執筆は1947年で、『基底と頂上の探求』に収録される。

²⁸ OC, p. 267 : «La poésie est de toutes les eaux claires celle qui s'attarde le moins aux reflets de ses ponts. Poésie, la vie future à l'intérieur de l'homme requalifié.», 『破碎されたポエム』所収の「蛇の健康を祝して」À la santé du serpent より引用。

えてくれ」²⁹。そして、「私たちは、私たちの前を、増大していく水があふれ出るのを見ていた」³⁰。ランボーと、シャルの故郷を流れるソルグ川は、シャルのテキストの中で「似た者（同類、同胞）」semblable として提示されている。

ランボーは、脱出しながら、過去の中にそして未来の中に無差別に自らの黄金時代を位置づける。彼は自らを固めない³¹。

ここでは「自らを固めない」と訳したが、ランボーは、現在の中に住まないし定着しない。あるいは現在の中で自らが確立されてしまうことを拒否し、常に「脱走する」³²。しかし、安定を嫌う、このような性格は、混乱をもたらすものでもある。

この常軌を逸した身体と魂の躍動、標的に達し爆発させるこの砲弾、そうだ、それこそが一人の人間の生なのだ！³³

「身体と魂の躍動」は、「常軌を逸した」absurde とあるように、同時に「不条理」であって、論理的で首尾一貫したものではない。「躍動」élan とは、秩序正しく一步一步進んでいくものではなく、予想外の飛躍であり、激情のようにほとばしるものである。さらに「砲弾」という比喩も物騒なものであるが、「一人の人間の生」とはかくのごとく、本来は、予想のつかないものであり、同時に破壊的でもあると言明される。「世界にやって来て何も乱すことのない者は、配慮にも忍耐にも値しない」³⁴。このアフォリズムからも読み取れるように、シャルの「混乱」への志向は非常に強く、それをもたらすことのない人間には相手にする価値すらないと言われてしまうのである。しかし、なぜシャルはこれほどまで詩人ランボーを信頼するのか。

私たちは、君と共にあることで可能な幸福を、証拠なしで、信じる者たちである³⁵。

²⁹ OC, p. 274 : «Rivière trop tôt partie, d'une traite, sans compagnon, /Donne aux enfants de mon pays le visage de ta passion.»

³⁰ OC, p. 275 : «Nous regardions couler devant nous l'eau grandissante.»

³¹ OC, p. 733 : «Rimbaud s'évadant situe indifféremment son âge d'or dans le passé et dans le futur. Il ne s'établissait pas.», 「アルチュール・ランボー」より引用。

³² 引用文には、「過去の中にそして未来の中に無差別に」とあり、単に未来という一方向だけが問題にはなっていないことが読み取れる。この点については、またあらためて考察する必要がある。

³³ OC, p. 275 : «Cet élan absurde du corps et de l'âme, ce boulet de canon qui atteint sa cible en la faisant éclater, oui, c'est bien là la vie d'un homme !», 「君はよくぞ出発したものだ、アルチュール・ランボーよ！」より引用。

³⁴ OC, p. 263 : «Ce qui vient au monde pour ne rien troubler ne mérite ni egards ni patience.», 「蛇の健康を祝して」より引用。

その信頼は、「証拠なし」の信頼である。

証拠の崩壊のたびに、詩人は未来の祝砲で答える³⁶。

確立された「証拠」は、いつか崩れ去る。それも生成変化ゆえであれば、「未来の祝砲」が可能になるのも同様の理由による。

ひとりの詩人は、証拠ではなく、自らの通過の痕跡を残さなくてはならない。ただ痕跡だけが夢を見させるのだ³⁷。

それゆえ、「詩人」によって遺されるのは、「証拠」ではなく「痕跡」である。「痕跡」ならば、私たち読者もその後を追わねばなるまい。つまり、「詩人」と「共に歩む者」*la compagne ou le compagnon* となることを要請されるのである。「驚異の、反乱の、慈善の持ち分」の「伝達」あるいは「伝染」を求めた時から、シャルルは一貫して、読者を単なる受け身の読者として扱うのではなく、詩に巻き込もうとしている。

絶えざる生成変化の相の下に世界をとらえること、これは非常に重要な思想ではあるが、しかし、それだけでは日常生活はままならない。知的思考も判断も、それに基づいた行動も、あらゆるものの同一性が保たれていない世界では不可能になってしまうだろう。レジスタンス時代の『イブノスの紙片』を見てみる。

可能なかぎり、有能であることを教えよ、到達すべき目的のため、その先ではなく。その先は煙だ。煙のあるところ、変化がある³⁸。

確実に作戦を実行しようとするとき、その目的が不安定なものであってはならない、予想外の事態があってはならないのである。確固たる「目的」を問題としなければならず、「煙」のように不定形で曖昧な、「変化」し続けるものを目指すことは、シャルルにとって不可能となった時代だ。

³⁵ OC, p. 275 : «Nous sommes quelques-uns à croire sans preuve le bonheur possible avec toi.», 「君はよくぞ出発したものだ、アルチュール・ランボーよ！」より引用。

³⁶ OC, p. 167 : «À chaque effondrement des preuves le poète répond par une salve d'avenir.», 「形式的分割」より引用。

³⁷ OC, p. 382 : «Un poète doit laisser des traces de son passage, non des preuves. Seules les traces font rêver.», 1957年初版の『図書館は燃えている、と他のポエム』*La bibliothèque est en feu et autres poèmes* 所収の「庭の中の仲間たち」*Les Compagnons dans le jardin* より引用。この詩集は、後に『群島をなす言葉』に入る。

³⁸ OC, p. 175 : «Autant que se peut, enseigne à devenir efficace, pour le but à atteindre mais pas au delà. Au delà est fumée. Où il y a fumée il y a changement.», 『イブノスの紙片』の「1」。

アルチュール・ル・フォルは、最初の手探りの後、いまや、決然たる力強い気質をもって、私たちの運任せの勝負に参加している。行動への彼の激しい欲求は、私が彼に割り振る明確な任務で満足しなければならない。彼は従い自制する、叱責される怖れから！ そうでなければ、彼の勇敢さが彼を最終的にどんな窮地に滑り込ませるか、神のみぞ知るところだ！ まるで古の時代の一兵士のような、忠実なるアルチュール！³⁹

成功を収めるためには、過大な「勇敢さ」や「行動への欲求」を抑制し、確実に作戦を実行する必要がある。レジスタンスの同志のひとり、「アルチュール・ル・フォル」Arthur le Folの「ル・フォル」は「狂人」などを意味する語だが、決して軽蔑的に用いられているのではない。ランボーと同じアルチュールという名前からも、シャルがランボーを思い起こしていないと誰が断言できようか。しかし、「狂人」のごとく度外れな彼の性格を一種の教育によって矯正し、「忠実なるアルチュール」へと変貌させなくてはならない、それがレジスタンス時代のシャルの姿勢である⁴⁰。

私は歌う、新生児の顔をした熱を、絶望した熱を⁴¹。

これは戦後まもなく書かれたアフォリズムであり、シャルは再び「歌」を始める。戦後のフランス、あるいはフランスにとどまらず世界は、「新生児」としてもう一度歩み始めなければならなかったが、その「新生児」は希望に満ちて生まれてきたのではなく、「絶望し」ていた。しかし、まだ死者のように冷たくなってはおらず、「熱」を放ち生命力を宿している。

昇る朝日の精神状態は、残酷な昼間と、夜の記憶にもかかわらず、歓喜である。血塊の色は夜明けの赤さになる⁴²。

流れた血はやがて「血塊」となるが、その「赤さ」は、新しい始まりである「夜明け」の「赤さ」

³⁹ OC, p. 177 : «Arthur le Fol, après les tâtonnements du début, participe maintenant, de toute sa forte nature décidée, à nos jeux de hasard. Sa fringale d'action doit se satisfaire de la tâche précise que je lui assigne. Il obéit et se limite, par crainte d'être tancé ! Sans cela, Dieu sait dans quel guépier final sa bravoure le ferait glisser ! Fidèle Arthur, comme un soldat de l'ancien temps !», 『イブノスの紙片』の「9」。

⁴⁰ ならば、戦後はどうなるのだろうか。いや、戦時中だけ、必要によってやむなく態度を改めたというに過ぎないのか。詩人シャルのエクリチュール（書かれたものと、そこに刻まれた「痕跡」としての彼の生と書くという行為）を読み考えることで、危機の時代を「詩人」が生きてはということなのかさらに深く問うことが求められるが、それは今後の課題としたい。

⁴¹ OC, p. 262 : «Je chante la chaleur à visage de nouveau-né, la chaleur désespérée.», 「蛇の健康を祝して」より引用。

⁴² OC, p. 329 : «L'état d'esprit du soleil levant est allégresse malgré le jour cruel et le souvenir de la nuit. La teinte du caillot devient la rougeur de l'aurore.», 1950年出版の『朝の人々』Les Matinaux 所収の「朝の人々の赤さ」Rougeur des Matinaux より引用。

に変わることができる。いや、そう変えていくこと、もしくはその変化への可能性に気づかせることが、「詩人」のなすべきことではないだろうか。

3

前章（「2」）で問題にした「生成」と「川」を目にして、思い出すべきひとりの哲学者がいる。それは、ヘラクレイトスである。「同じ河の中に入っていく者に、別の、そしてさらに、また別の水が（つぎつぎに）流れてくる」⁴³、「われわれは、同じ川に歩を踏み入れるとともに、踏み入れない」⁴⁴、「同じ川に二度入ることはできない」⁴⁵など、ヘラクレイトスは「川」の比喩によって生成変化を語った。「太陽は日々新しい」⁴⁶という断片も、先に引用したアフォリズムと似ている。

ヘラクレイトスには、生成とともに、万物が闘争状態にあるという思想がある。「反対するものが協調する、そして異なる（音）から最も美しい音調が生じ、万物は争いによって生まれる」⁴⁷。この思想は、シャルルにも息づいていると思われる。

ポエジーの中心で、ひとりの反対者が君を待っている。それは、君の至高者だ。正々堂々、彼と戦いなさい。

ポエジーは戦いの場であり、そこには私たちが戦うべき敵がいる。上のアフォリズムでは、「反対者」、「至高者」とされているが、『イプノスの紙片』では、次のような表現が用いられていた。

詩人の努力は、かつての敵を誠実な敵対者へと変形させることを目指している、実りをもたらす明日が来るかは、この企図が成功するかどうかにかかっている、とりわけ、あらゆる帆がそびえ立ち、絡み合い、傾き、殲滅される、そして、それらの帆をふくらませる大陸の風が、その心を深淵の風に譲り渡してしまっている、そんな時には⁴⁸。

このアフォリズムは、フランス語ならではの書き方がなされている。そのため、上記の翻訳には原文の正確な日本語訳とは言えないところがある。「あらゆる帆」と訳した *Toute la gamme des voiles* の *voile* は、真理を覆う「ヴェール」という意味も暗に含んでおり、二重の意味が込められ

⁴³ 廣川洋一『ソクラテス以前の哲学者』講談社（学術文庫）、1997年、p. 232.

⁴⁴ *Ibid.*, p. 238, 引用に際し、原文の傍点は省略した。

⁴⁵ *Ibid.*, p. 244.

⁴⁶ *Ibid.*, p. 231.

⁴⁷ *Ibid.*

⁴⁸ OC, p. 176 : «L'effort du poète vise à transformer *vieux ennemis* en *loyaux adversaires*, tout lendemain fertile étant fonction de la réussite de ce projet, surtout là où s'élançait, s'enlance, décline, est décimée toute la gamme des voiles où le vent des continents rend son cœur au vent des abîmes.», 『イプノスの紙片』の「6」。

ているのではないかと筆者は考えている。だが、まずは船の「帆」と解すべきだろう。人間たちの生の状況が航海に譬えられているのである。

戦いの相手は、どんな相手でもよいわけではない。「正々堂々」loyalement 戦うに値する「誠実な敵対者」loyaux adversaires でなくてはならないのである。もしそうでなければ、「対立物同士の高められる結合」l'exaltante alliance des contraires⁴⁹ をもたらすことはないだろう。「実りをもたらす明日」を実現させるため、「詩人」の責務は、戦うだけの価値を持つ「敵対者」へと「かつての敵」を「変形させる」ことである。「形式的分割」には、次のアフォリズムがある。

想像力とは、数多くの不完全な人々を現実から追い出し、欲望の魔術的で壊乱的な力を借りて、すっかり満足のいく存在の姿で彼らを帰還させることである。それはその時、消しがたい、非創造的な実在である⁵⁰。

特に戦時中のテキストにおいて、「変形させる」ことが「詩人」の重要な役割であったことは確かである⁵¹。

『イプノスの紙片』のアフォリズムをもう一度見てもらいたい。「詩人の努力は、かつての敵を誠実な敵対者へと変形させることを目指している、実りをもたらす明日が来るかは、この企図が成功するかどうかにかかっている、とりわけ、あらゆる帆がそびえ立ち、絡み合い、傾き、殲滅される、そして、それらの帆をふくらませる大陸の風が、その心を深淵の風に譲り渡してしまっている、そんな時には」。メタファーに満ちた後半部は難解ではあるが、「あらゆる帆がそびえ立ち、絡み合い、傾き、殲滅される」の「帆」を先述したように「ヴェール」へと変換し、さらにニーチェを参照することから始めれば、シャルルへの理解を深めることができるだろう。『善悪の彼岸』の有名な序文から引用する。

真理は女である、と仮定すれば、——どういうことになるか？ すべての哲学者は、彼らがドグマティカー（独断論者）であったかぎり、この女をうまく理解できなかったのではないかという疑いも、もっともなことではなからうか？ これまで彼らが真理に近づく際にとった常套的やりまえである恐るべき厳粛さ、ぶざまな厚かましさは、女というやつを手なずけるには実に拙劣な、不似合いなやり口ではなかったか？ 女が手なずけられなどしなかったのは、き

⁴⁹ OC, p. 159. 「形式的分割」より引用。

⁵⁰ OC, p. 155 : «L'imagination consiste à expulser de la réalité plusieurs personnes incomplètes pour, mettant à contribution les puissances magiques et subversives du désir, obtenir leur retour sous la forme d'une présence entièrement satisfaisante. C'est alors l'inextinguible réel incréé.»

⁵¹ 白石幸作「ルネ・シャルル「明白なる分け前」試論——「詩人」と「変形」——」（前掲論文）でも扱っているが、また別の機会にあらためて論じたい。

まりきったことだ⁵²。

「真理を女である、と仮定すれば」、その身を覆う「ヴェール」を乱暴に剥ぎ取るような真似をするべきではない。シャルルは、ポエジーと真理（あるいは真実）についてこう書いている。「ポエジーと真実は、私たちの知るように、同義語である」⁵³。シャルルの書くものが謎に満ちているのも、おそらくポエジー（＝真実、真理）から軽率に「ヴェール」を剥いではならないことを知っているからである。しかし、シャルルのアフォリズムでは、もはや問題は「拙劣」な「哲学者たち」だけの問題ではなくなっていることが見て取れる。筆者にはその射程がどこまで届いているのか特定することはできない。だが、科学的、技術的進歩によって、人間は自らがまるで全知の存在であるかのような錯覚を抱き、その結果、「あらゆるヴェール」が「殲滅」されている。そんな時代への危機感を読み取っても間違いではあるまい。

私たちからは神秘的に好意に満ちていながらも制限された距離に保たれていた何かに、私たちは突然あまりにも近づきすぎてしまった。その時以来、それは蝕むような苦痛である。私たちの頭を支えるものは消えてしまった⁵⁴。

「隔たりを消し去ることは、殺す」⁵⁵ ことである。上のアフォリズムは、「結びなおすために」*Pour renouer* と題されたアフォリズムのうちのひとつである。シャルルは、私たちと名指ししようのない何かとの絆を「結びなおすために」詩を書くのである。

自らが、他人の過失のせいで死につつある美と連帯していながらも無力な一部であると感じることは耐え難い。美の胸の中で連帯して、美の精神の動きの中で無力で⁵⁶。

『イプノスの紙片』の最後では、「私たちの暗闇の中には、「美」のためのひとつの場所があるのではない。あらゆる場所が「美」のためにあるのだ」⁵⁷ という認識に達したシャルルだったが、そ

⁵² フリードリッヒ・ニーチェ『善悪の彼岸 道徳の系譜（ニーチェ全集11）』信太正三訳、筑摩書房（ちくま学芸文庫）、1993年、p. 11.

⁵³ OC, p. 159 : «poésie et vérité, comme nous savons, étant synonymes», 「形式的分割」より引用。

⁵⁴ OC, p. 370 : «Nous nous sommes soudain approchés de quelque chose dont on nous tenait à une distance mystérieusement favorable et mesurée. Depuis lors, c'est le rongement. Notre appuie-tête a disparu.», 『群島をなす言葉』所収の「結びなおすために」より引用。

⁵⁵ OC, p. 767 : «Supprimer l'éloignement tue.», 1965年出版の『壊れやすい年齢』*L'Âge cassant* より引用。このアフォリズム集は、後に『基底と頂上の探求』の末尾に収録される。

⁵⁶ *Ibid.*, «Il est insupportable de se sentir part solidaire et impuissante d'une beauté en train de mourir par la faute d'autrui. Solidaire dans sa poitrine et impuissant dans le mouvement de son esprit.», 「結びなおすために」より引用。

の後、上のアフォリズムのような苦い認識を抱かざるをえなかった。というのもシャルルは、現世を超越してしまった観念的な「美」la Beautéを問題にする詩人ではないからだ。「美」は私たちとともに、ある場所を占めなくてはならない。

一輪の薔薇に、私は結ばれている⁵⁸。

彼が自らを結びつけるのは、今ここにある「一輪の薔薇」である。

しかし、「美」と「連帯し」、「結ばれ」ることは可能だとしても、シャルルが、「美」とはやはり神聖なものなのだと言明していることを忘れてはならない。もし気安く「彼女に言葉をかければ、冒涇になるだろう」⁵⁹。それゆえ、シャルルは「彼女に、その道の歩みを譲りなさい」⁶⁰と書くのである。同時に、我が物にできないからこそ、欲望は果てることがない。

ポエムとは、欲望のままにとどまる欲望の実現された愛である⁶¹。

不滅の「欲望」によって、「詩人」は「繰り返される疲労を、再生の積み荷に変換し」⁶²、「その日その日に自らの健康を広げる」⁶³ことが可能になる。「あらゆる帆をふくらませる大陸の風が、その心を深淵の風に譲り渡してしまっている」、つまり、大陸から大陸へと私たちの乗る船を導くはずの「風」が、もはや底なしの「深淵」にしか連れて行ってくれなくなってしまった時でさえも、「難攻不落」inexpugnable⁶⁴の「詩人」は、「実りをもたらす明日」を目指し、戦うことをやめないのである。

4

本論冒頭で引用した「なぜ、「詩人」という語が何度も私をよぎるのか？」という言葉の続きには、「主人である闇を保存するという必要から」⁶⁵という箇所がある。「闇」こそが私たちの「主人」としての資格を持つのである。「眼帯」は、私たちに「闇」を見させるためにある。戦後のチャー

⁵⁷ OC, p. 232 : «Dans nos ténèbres, il n'y a pas une place pour la Beauté. Toute la place est pour la Beauté.», 『イプノスの紙片』の「237」。

⁵⁸ OC, p. 381 : «À une rose je me lie.», 「庭の中の仲間たち」より引用。

⁵⁹ OC, p. 130 : «Il serait sacrilège de lui adresser la parole.», 『ただ留まるのは』所収の「風に別れを」Congé au vent より引用。

⁶⁰ *Ibid.*, «cédez-lui le pas du chemin»

⁶¹ OC, p. 162 : «Le poème est l'amour réalisé du désir demeuré désir.», 「形式的分割」より引用。

⁶² OC, p. 164 : «en convertissant un cycle de fatigues en fret de résurrection», 「形式的分割」より引用。

⁶³ OC, p. 163 : «étend sa santé chaque jour», 「形式的分割」より引用。

⁶⁴ OC, p. 166, 「形式的分割」のアフォリズムを参照。

⁶⁵ OC, p. 744 : «De la nécessité de conserver les maîtresses ombres.», 「古い印象」より引用。

ルが読者に提示した「眼帯」とは、詩集『激情と神秘』であった。つまり、詩（ここでは、具体的に存在するポエム）こそ、「眼帯」としての役目を果たす。

しかしまた、シャルルの詩は、何も見えない「闇」という混沌の中で読者を途方に暮れさせるだけで終わるものではない。「己の前に未知なくして、いかに生きるのか」⁶⁶。「未知」こそが、生きる力となるとシャルルは考えていた。「未知」を前にした私たち読者は「不確か」になるが、「私は、4月に果樹がそうであるように、自らの目的に不確かな人間を愛する」⁶⁷と書かれているように、シャルルはこの「不確か」という状態を重んじていた。なぜなら「不確か」であることによって、ひとは生成する、つまり新たな可能性に向けて開かれることになるからだ。私たちは、未だ知られざるものにとどまっている、謎に満ちたシャルルの詩を読むという戦いをやめるべきではない。

⁶⁶ OC, p. 247 : «Comment vivre sans inconnu devant soi ?», 『破碎されたポエム』の「序」Argument より引用。筆者は、Argument と題されたシャルルのテキストを日本語に訳すなら、「序」と訳するのが適切ではないかと考えている。テキストの解釈とともに、別の機会に論じたい。

⁶⁷ OC, p. 757 : «J'aime l'homme incertain de ses fins comme l'est, en avril, l'arbre fruitier.», 1951年初版の『引き撃った平穩に』À une sérénité crispée より引用。このアフォリズム集は後に、『基底と頂上の探求』に収録される。